

グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門活動報告

【1】 比較日本学教育研究部門運営委員会

古瀬奈津子（比較社会文化学）、浅田徹（比較社会文化学）、新井由紀夫（比較社会文化学）、石井久美子（比較社会文化学）、大藪海（比較社会文化学）、香西みどり（ライフサイエンス）、神田由築（比較社会文化学）、竹村明日香（比較社会文化学）、田中琢三（比較社会文化学）、谷口幸代（比較社会文化学）、中野裕考（比較社会文化学）、難波知子（比較社会文化学）、松岡智之（比較社会文化学）、宮内貴久（比較社会文化学）、宮尾正樹（比較社会文化学）、本林響子（比較社会文化学）、湯川文彦（比較社会文化学）

- 第1回 平成30年（2018）4月18日
- 第2回 平成30年（2018）5月23日
- 第3回 平成30年（2018）6月20日
- 第4回 平成30年（2018）7月25日
- 第5回 平成30年（2018）10月2日
- 第6回 平成30年（2018）11月21日
- 第7回 平成30年（2018）12月19日
- 第8回 平成31年（2019）1月16日
- 第9回 平成31年（2019）2月20日
- 第10回 平成31年（2019）3月11日

【2】 比較日本学教育研究部門研究委員会

古瀬奈津子（比較社会文化学）、新井由紀夫（比較社会文化学）、石井久美子（比較社会文化学）、大藪海（比較社会文化学）、香西みどり（ライフサイエンス）、田中琢三（比較社会文化学）、竹村明日香（比較社会文化学）、中野裕考（比較社会文化学）、難波知子（比較社会文化学）、宮下聡子（比較社会文化学）、宮内貴久（比較社会文化学）、湯川文彦（比較社会文化学）

- 第1回 平成30年（2018）4月18日

- 第2回 平成30年（2018）5月23日
- 第3回 平成30年（2018）6月20日
- 第4回 平成30年（2018）7月25日
- 第5回 平成30年（2018）10月2日
- 第6回 平成30年（2018）11月21日
- 第7回 平成30年（2018）12月19日
- 第8回 平成31年（2019）1月16日
- 第9回 平成31年（2019）2月20日
- 第10回 平成31年（2019）3月11日

【3】 第20回国際日本学シンポジウム

テーマ「変革と継承の明治文化

—地域／都市からみた文化形成—」

主催：グローバルリーダーシップ研究所

比較日本学教育研究部門

日程：平成30年（2018）7月7日（土）～8日（日）

場所：お茶の水女子大学 本館306室

▽7月7日（土）

セッションⅠ「地域からみた文化形成」

【挨拶】猪崎弥生（お茶の水女子大学理事）

【趣旨説明・司会】難波知子（お茶の水女子大学）

【基調講演】マーガレット・メール

（コペンハーゲン大学）

「ローカル・ナショナル・グローバルの相互関係

—四竈兄弟と仙台地域の音楽文化を中心に—」

【研究報告】

北原かな子（青森中央学院大学）

「洋楽受容と士族たち—津軽地方を中心に—」

寺尾美保（東京大学 [院]）

「大名華族としての島津家と鹿児島」

▽7月8日（日）

セッションⅡ「都市からみた文化形成」

【趣旨説明・司会】湯川文彦（お茶の水女子大学）

【基調講演】鈴木淳（東京大学）

「煙突と電柱の立ち並ぶ街

—明治期東京の技術と生活—」

【研究報告】

湯川文彦（お茶の水女子大学）

「官僚からみた「都市」問題

—明治前期の行政文化と都市—」

平山昇（九州産業大学）

「都市祭礼の近代史—博多松囃子を事例に—」

満蘭勇（北海道大学）

「商店街の成立史からみた明治時代

—店舗併用住宅に注目して—」

【4】シンポジウム実行委員会

古瀬奈津子（部門長）

難波知子（司会）

湯川文彦（司会）

【5】第13回国際日本学コンソーシアム

テーマ「いのち・自然・社会」

主催：グローバルリーダーシップ研究所

比較日本学教育研究部門

日程：平成30年（2018）12月10日（月）～11日（火）

場所：文教育学部1号館1階第1会議室

参加校：北京外国語大学北京日本学研究センター（中国）、パリ・ディドロ大学（フランス）、釜山大学校（韓国）、国立台湾大学（台湾）、ニューサウスウェールズ大学（オーストラリア）、カレル大学（チェコ）、お茶の水女子大学（日本）

▽12月10日（月）

○開会式

【挨拶】古瀬奈津子（部門長）

○日本文学部会

【挨拶】三浦徹（お茶の水女子大学理事）

【司会】松岡智之（お茶の水女子大学）

ギユモ・オリアヌヌ（パリ・ディドロ大学）

「『伊勢物語』における笑い

：人物と語り手との関係」

馬如慧（北京外国語大学）

「『源氏物語』における「中の品」女性論

—「葎の門」を手掛かりに—」

トムシュー・アダム（カレル大学）

「中古と中世文学における竜宮訪問のモチーフの変遷」

胡睿慈（台湾大学）

「『空華集』の絶句における「茶」の表現

—空間の変化をめぐる—」

朱秋而（台湾大学）

「幕末詩人館柳湾詩における自然描写

—中国詩との比較を通して—」

范淑文（台湾大学）

「作家に語られた震災—多和田葉子を中心に—」

▽12月11日（火）

○日本文化部会

【司会】董航（お茶の水女子大学）

馬場貴和子（お茶の水女子大学）

「近世箱館の都市社会」

鈴木聖子（パリ・ディドロ大学）

「言葉と歌と息のあいだにいのちを描く：

小沢昭一『日本の放浪芸』における声の文化」

保田那々子（お茶の水女子大学）

「童装束としての汗衫の成立」

ダヴィッド・ラブス（カレル大学）

「幕末時代における技術と公論：

横井小楠を中心に〈命・自然・社会〉」

宋金文（北京外国語大学北京日本学研究センター）

「災害復興におけるソーシャルキャピタル（= SC）の役割」

○日本語学・日本語教育学部会

日本語学部会

【司会】佐藤文（お茶の水女子大学）

池田來未（お茶の水女子大学）

「複合動詞『～トオス』の史的変遷

—文法化に着目して—」

朴美賢（釜山大学校）

「釈日本紀における韓国系固有名詞の声点について」

日本語教育学部会

【司会】サクンクルー・カンズィニー

（お茶の水女子大学）

奥村麻衣子（お茶の水女子大学）

「普通体基調会話における日本語学習者の丁寧体使用に関する一考察」

ジェシカ・レウン（ニューサウスウェールズ大学）

「日本語学習者のメール文に見られる『断り』」

トムソン木下千尋（ニューサウスウェールズ大学）

「I-JAS データの社会文化的考察」

○全体会・閉会式

【司会・挨拶】古瀬奈津子（お茶の水女子大学）

【6】 コンソーシアム実行委員会

古瀬奈津子

（部門長、日本文化部会コーディネーター）

松岡智之（日本文学部会コーディネーター）

神田由築（日本文化部会コーディネーター）

竹村明日香

（日本語学・日本語教育学コーディネーター）

本林響子

（日本語学・日本語教育学コーディネーター）

研究プロジェクト活動報告

1. 文理融合の食文化研究

- ①主旨：現在、世界中で「食」に対する関心が高まりつつあり、日本においても様々な角度から「食」の諸問題が議論されている。これらの議論の背景には、西洋科学文明の行き詰まりがある。「食」の現代的課題を解決するためには、世界的な視点で日本の「食」の問題を考えていく必要がある。また、数量化に象徴される栄養科学の視点からだけではなく、人文学からの視点を含めた複合的な文理融合の視点によって、「食」の問題に対処することが肝要である。本研究では、本学で研究・教育が蓄積されてきた国際日本学分野と食物栄養学分野の研究者・院生が合同で、これらの課題解決のために共同研究を行う。
- ②プロジェクト担当者：古瀬奈津子（本学教員）
- ③学内研究員：
香西みどり（本学教員）、村田容常（本学教員）、
神田由築（本学教員）、宮内貴久（本学教員）、
新井由紀夫（本学教員）、伊藤有紀（本学研究員）
- ④学内協力員：
- ⑤客員研究員：
マクシム・シュワルツ（パスツール研究所）、
シャルロツテ・フォン・ヴェアシュア（フランス国立高等研究院）
- ⑥研究協力員：
野田有紀子（本学修了生）、矢越葉子（本学修了生）
- ⑦活動経過：
(1) 授業等
文理融合リベラルアーツ「色・音・香」9「おいしさと色・音・香」を、古瀬、森光（食物）、安成（比較歴史）の3人で後期に開講した。また、再来年度以降の開講について、

来年度検討することを計画した。

2. 東アジアにおける古代末期の王権と儀式の比較的研究

- ①主旨：東アジアにおいては古代末期にあたる時期に、日本では院政が成立して院に権力が集中し、中国では唐宋変革期の皇帝権力が専制化するように、王権が権力集中することが知られている。本プロジェクトでは、なぜこの時期に王権の権力集中が行われるのか、権力集中化は儀式などの支配構造にどのような影響を与えたのかを比較史的視点から解明することを目的とする。
- ②プロジェクト担当者：古瀬奈津子（本学教員）
- ③学内研究員：
古内絵里子（本学研究員）、東海林亜矢子（本学研究員）
- ④学内協力員：
永井瑞枝（本学院生）、保田那々子（本学院生）
- ⑤客員研究員：
金子修一（國學院大学）、石見清裕（早稲田大学）、桑野栄治（久留米大学）、大隅清陽（山梨大学）、藤森健太郎（群馬大学）、末松剛（九州産業大学）、稲田奈津子（東京大学史料編纂所）、丁珍妮（韓国・祥明大学）
- ⑥研究協力員：
重田香澄（山口大学非常勤講師）、野田有紀子（本学修了生）、矢越葉子（本学修了生）、谷田淑子（本学修了生）
- ⑦活動経過：
(1) 著書・雑誌論文等
古瀬奈津子編『律令国家の理想と現実』（古代文学と隣接諸学5）竹林舎、517ページ、2018年9月
Furuse Natsuko “The Emperor and Nobles as

Seen from the Management of Rituals in Regency and Insei Periods” ‘TRANSACTIONS OF THE INTERNATIONAL EASTERN STUDIES’ No. LXIII 2018, 2018/12

野田有紀子「日本古代における官人の学問的世界と政治的秩序」『律令国家の理想と現実』（前掲）139-162ページ

矢越葉子「文書行政と官僚制」『律令国家の理想と現実』（前掲）163-185ページ

永井瑞枝「『獄令』編纂と断罪制度」『律令国家の理想と現実』（前掲）380-413ページ

保田那々子「童装束としての汗衫の成立」『比較日本学教育研究部門年報』第15号、2019年3月

(2) 学会発表等

古瀬奈津子「撰関・院政期の儀式運営からみた天皇と公卿」、第63回国際東方学者会議「シンポジウムⅣ 国家と儀礼」、2019年5月19日、於日本教育会館

東海林亜矢子「後の母源倫子について」、シンポジウム「女と男の食文化」、2019年11月11日、於齋宮歴史博物館（三重）

保田那々子「童装束としての汗衫の成立」第13回国際日本学コンソーシアム「いのち、自然、社会」、2018年12月11日、於お茶の水女子大学

(3) その他

科学研究費助成事業応募に向けて打合せを行った。

3. 文学における異界の表象

- ①主旨：異界とは人間が生きる日常世界の外側にある世界のことであり、異界の存在は古今東西のさまざまな物語に登場してきた。本プロジェクトでは、おもに日本とヨーロッパの文学作品における異界との交流譚を取り上げ、それらを比較・検討することによって、異界がどのよう

なものとして表象されてきたのかを明らかにする。

②プロジェクト担当者：田中琢三（本学教員）

③学内研究員：

④学内協力員：

⑤客員研究員：

⑥研究協力員：

加藤敦子（都留文科大学）、兼岡理恵（千葉大学）、中丸禎子（東京理科大学）

⑦活動経過：

[招待講演]

中丸禎子「人魚姫像をめぐる人々」、お茶の水女子大学仏語圏言語文化コース主催（於：お茶の水女子大学）、2018年11月22日

[口頭発表]

田中琢三「モーリス・バレスとドイツ：モーゼル川流域の戦争モニュメントをめぐる」、日本比較文学会第56回東京大会（於：明治大学駿河台キャンパス）、2018年10月21日

4. 英語・日本語における食べ物に対する感覚評価と文化的アイデンティティ

Sensory Evaluation of Food and Cultural Identity in English and Japanese

- ①主旨：日本語と英語における、食べ物に関する味覚や嗅覚などについての感覚評価の表現について分析する。それらが日英の文化的なアイデンティティ形成とどのように結びつくか等について、インタビューや会話等を材料として研究する。

We propose to investigate how people describe their taste preferences and experience food in English and Japanese. We will use interviews, surveys and sensory evaluative conversations to investigate how people do use verbal/nonverbal behavior to assess food, influence one another's preferences, and construct identities.

②プロジェクト担当者：香西みどり（本学教員）

- ③学内研究員：石井久美子（本学教員）
 ④学内協力員：福留奈美（本学研究員）
 ⑤客員研究員：
 ポリー・ザトラウスキー（米・ミネソタ大学）、
 星野祐子（十文字学園女子大学）
 ⑥研究協力員：
 ⑦活動経過：

本年度は、昨年度行った乳製品の試食会を文字化し、分析した。

その他、本年度の本プロジェクトに関連して発表した研究成果は下記の通りである。

(1) 著書

Szatrowski, Polly. 2018. Japanese discourse/conversation analysis. Handbook of Japanese linguistics, ed. by Yoko Hasegawa, 649-677. Cambridge: Cambridge University Press.

Szatrowski, Polly. (印刷中) Tracking references to unfamiliar food in Japanese Taster Lunches: Negotiating agreement while adapting language to food. The JAPANESE language from an empirical perspective: Corpus-based studies and studies on discourse, ed. by Andrej Bekeš & Irena Srdanović, 53-75. Ljubljana, Slovenia: University Press, Faculty of Arts= Znanstvena založba Filozofske fakultete.

(2) 雑誌論文

ポリー・ザトラウスキー (2018) 「相互作用によるオノマトペの使用－乳製品の試食会を例にして－」『国立国語研究所論文集』16、pp.77-106.
<http://doi.org/10.15084/00001609>

(3) 学会発表

福留奈美「料理の日本語の翻訳とその課題：和風料理の名称の英訳について」電子情報通信学会技術研究報告、信学技法117(519)、pp.3-18、2018年

ポリー・ザトラウスキー「学習者が食べ物を評価するのに役立つオノマトペを含む発話連鎖」2018年度日本語教育学会春季大会パネルセッ

ション「食べ物を通じた日本語教育－体験を語る評価、オノマトペ、感覚表現」、東京外国語大学、2018年5月26日

福留奈美、ポリー・ザトラウスキー「学習者が食べ物の食感を表すのに役立つオノマトペ」2018年度日本語教育学会春季大会パネルセッション「食べ物を通じた日本語教育－体験を語る評価、オノマトペ、感覚表現」、東京外国語大学、2018年5月26日

原田康也、森下美和、平松裕子、福留奈美、佐良木昌「食感のオノマトペ・ワークショップ－食文化の固有性・共通性から考える翻訳可能性－、食べ物と食感を表すオノマトペ：食文化の感覚的共有における役割」日本認知科学会第35回大会オーガナイズドセッション、2018年
 福留奈美、伊尾木将之「レシピサービス「クックパッド」におけるオノマトペの使用－ABAB型を中心に－」計量国語学会大会、2018年

Nami Fukutome, Onomatopoeia Used in Product Descriptions for Japanese Commercial Snacks – Focus on Terms Related to Food Texture –, ICPEAL 17: The international Conference on the Processing of East Asian Languages, 2018

Nami Fukutome, Yasunari Harada, Flavor Wheel Terminology and Challenges in Translation – Focusing on English and Japanese Vocabulary for Wine, Sake and Soy sauce-, The 32nd Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation (PACLIC32), 2018

星野祐子「『食』の専門誌『食道楽』における広告の文体－明治後期と昭和初期における広告を対象に－」日本文体論学会第114回大会、神戸大学、2018年10月20日

(4) 基調講演

Szatrowski, Polly. 2018. Language and Japanese food in conversational interaction. Keynote lecture at the International Conference on the Language of Japanese Food. York University. March 4. Toronto,

CANADA.

(5) 講演

ポリリー・ザトラウスキー「データベースに基づく「Pない」・「Pじゃん」・「Pだろう」について」早稲田大学、2018年6月8日。

ポリリー・ザトラウスキー「乳製品の試食会における否定疑問文の使用について」大妻女子大学、2018年6月19日。

ポリリー・ザトラウスキー「相互作用による否定疑問文の使用－乳製品の試食会を例に－」大阪大学、2018年7月9日。

ポリリー・ザトラウスキー「乳製品の試食会のコーパスで見るモダリティと相手への働きかけの境界」早稲田大学、2018年7月26日。

ポリリー・ザトラウスキー「乳製品の試食会における否定疑問文の形と使用について」第8回談話分析コロキウム、山形、2018年12月22日。

5. 少女雑誌にみる外来語の総合的研究

①主旨：明治末から昭和半ばにかけて発行された、少女対象の総合雑誌『少女の友』を資料に外来語を調査する。子ども向けに用いられている外来語というのは定着度が高く、当時、世代を問わずに用いられたと考えられる。それらがどのような特徴を持つのか、既存のコーパスや、当時刊行されていた外来語辞典との比較から明らかにする。

②プロジェクト担当者：石井久美子（本学教員）

③学内研究員：

④学内協力員：

河野礼実（本学AF）、三浦憂紀（本学AF）、田嶋明日香（本学院生）、野口芙美（本学院生）、宇野和（本学院生）

⑤客員研究員：

⑥研究協力員：

⑦活動経過：

2018年度は、本プロジェクト始動の年であ

り、分析対象とする資料の収集と、データベース作成への着手が主であった。

対象資料となる『少女の友』について、大正期を中心に、国立国会図書館での閲覧・複写を行った。同図書館未所蔵分は、8月に大阪府立中央図書館国際児童文学館にて閲覧・複写し補った。

本年度の本プロジェクトに関連して発表した成果は下記の通りである。

高崎みどり編(2019)『大正期『中央公論』『婦人公論』の外来語研究一論と広告にみるグローバルゼーション』富山房インターナショナル

来年度は、引き続き資料収集とデータ作成を行う。これらをもとに『言語と食べ物（仮）』への論文投稿や、大学院の授業での活用を予定している。

6. 現代における民俗学の再構築

①主旨：現代における民俗学の再構築を目指して、以下の三つの課題の実現を目指す。①先鋭化：民俗学の先人たちを乗り越え、新たな理論の構築を目指す。②実質化：民俗学において自明視されていた知的前提や技法を明晰に表現し、他分野との対話と開かれた議論の土台を作り出す。③国際化：国際的な広がりをもった日本民俗の把握を推し進めるとともに、世界各国の民俗学との交流を確立する。

②プロジェクト担当者：宮内貴久（本学教員）

③学内研究員：

④学内協力員：

⑤客員研究員：

飯倉義之（國學院大学）、及川祥平（成城大学）、川田牧人（成城大学）、川森博司（神戸女子大学）、島村恭則（関西学院大学）、菅豊（東京大学）、塚原伸治（茨城大学）、徳丸亞木（筑波大学）、野口憲一（日本大学）、俵木悟（成城大学）、古家信平（筑波大学）、渡部圭一（筑波大学）

⑥研究協力員：

⑦活動経過：

◆「ジェンダー・セクシュアリティからみる近現代—民俗学と歴史学の視点から—」

日時：2018年4月30日（月）14：00～17：30

会場：成城大学図書館地下2階AVホール

趣旨説明：菊田祥子（成城大学大学院博士課程後期）

発表者：

菊田祥子「日本都市の祭礼・祝祭にみるジェンダー・セクシュアリティ」

小泉友則（立命館大学非常勤講師）「女兒の性的早熟論と植民地主義・帝国主義—利用される女兒のジェンダー・セクシュアリティ—」

コメント：鶴理恵子（跡見学園女子大学）

◆「憑きもの」研究の現代的可能性を探る

日時：2018年8月4日（土）14：00～17：30

会場：神戸大学 鶴甲第一キャンパスE棟4階大会議室

報告1：酒井貴広（早稲田大学）「憑きもの研究と地域社会の関わり—高知県幡多地方の「犬神」を巡って」

報告2：香川雅信（兵庫県立歴史博物館）「『憑きもの』研究から『妖怪』研究へ」

報告3：土取俊輝（神戸大学大学院、四天王寺大学非常勤講師）

「『憑きもの』は本当にいなくなったか」

コメント：梅屋潔（神戸大学）

◆「ヴァナキュラー文化研究の輪郭線—野生の文化を考える、野生の学問を考える—」

日時：2018年9月16日（日）13：00～18：00

会場：東京大学東洋文化研究所大会議室

イントロダクション：菅豊（東京大学）「導入・ヴァナキュラー文化研究—多義的で曖昧でふくよかな概念の輪郭線—」

発表1：小長谷英代（早稲田大学）「ヴァナキュラーの視点とその意義」

発表2：ウェルズ恵子（立命館大学）「ヴァナ

キュラー文学の研究手法—『ヴァナキュラー文化と現代社会』のエッセンスと主張」

7. 哲学、倫理、宗教、科学思想に関する比較思想的研究

A comparative study of philosophy, ethics, religion and scientific thought

①主旨：日本人研究者と各国の研究者・留学生が協力して、日本、西洋、東洋の伝統思想や現代哲学の比較研究を行うことによって、日本思想、西洋思想、東洋思想の特殊性、独自性を浮き彫りにすると同時に、共通点についても理解をふかめる。さらに、人間の存在構造、認識構造の普遍性についても明らかにする。日本思想史、西洋思想史、東洋思想史の研究者の意見交換によって幅広い視点から問題を考察する。

②プロジェクト担当者：

中野裕考（本学教員）、宮下聡子（本学教員）

③学内研究員：

三浦謙（本学教員）、小濱聖子（本学特任RF）、荒木夏乃（本学非常勤講師）、鈴木朋子（本学研究員）、石田恵理（本学AA）

④学内協力員：

清水真裕（本学院生）、陳先蘭（本学院生）、大持ほのか（本学院生）、飯田明日美（本学院生）

⑤客員研究員：

エマニュエル・カタン（フランス・ブレーズ・パスカル大学）、アラン・プティ（フランス・ブレーズ・パスカル大学教員）、ロレンテュ・アンドレイ（フランス・ブレーズ・パスカル大学院生）、徐翔生（台湾・政治大学）、吉田杉子（国学院大学）、森上優子（文部科学省）、木元麻里（文部科学省）、石崎恵子（JACSA）、斎藤真希（静岡大学）、小林加代子（中京大学）、遠藤千晶（東洋学園大学）、清水恵美子（茨城大学）、高島元洋（本学名誉教授）、徳重久美（姫路文学館）

⑥研究協力員：

ローレン・ジャフロ（フランス・パリ第一大学）、イブ・シュワルツ（フランス・エクス・マルセ大学）、清水恵美子（茨城大学）、荒木夏乃（本学非常勤講師）

⑦活動経過：

本年度は、本プロジェクトで自主的に以前から行っている研究を継続することができた。

◆近代比較思想研究会：本プロジェクトの一環として研究会を定期的で開催した。近代日本の思想家を、世紀転換期の日本と西洋における思想の動向の中に位置づけ、その思想の特色や意義を明らかにすることを目的とする。月一回程度の研究会を開催し、国内外の参考資料に目を通し議論を交わすとともに、学外における研究会報告、論文投稿などを行っている。メンバーは客員研究員の森上優子氏、清水恵美子氏、学内研究員の鈴木朋子氏である。今年度は、新渡戸稲造、増田義一、岡倉覚三（天心）、岡倉由三郎、清沢満之、吉谷覚寿、佐々木月樵を取り上げ、その思想や信仰の相違点と共通点を浮き彫りにするため、テキスト分析や国内外の思潮との関係性などを検討した。

◆日本倫理思想輪読会：本プロジェクトの一環として、輪読会を不定期に10回開催した。日本倫理思想史上で精査すべき文献をよく読み、その解釈を検討し合った。本年度は、九鬼周造の著作（『「いき」の構造』をはじめとして計3作品）を対象とした。中心となるメンバーは研究協力員の荒木夏乃氏、学内協力員の清水真裕氏、大持ほのか氏、阿部雅氏である。

◆古事記（伝）研究会：本プロジェクトの一環として、日本思想の原点となる倫理思想を探索すべく『古事記』本文を精読する研究会を6回開催した。日本思想の経験豊富な専門家、若手研究者、大学院生、それ以外にも西洋哲学、宗教学の研究者といった幅広い層の参加者が自由にテキストに向き合い議論した。西郷信綱、神野志隆光らの現代の注釈、本居宣長『古事記

伝』、さらにはそれ以前の代表的な日本書紀注釈や古事記本文の諸本の異同も参照しつつ、多様な読解の可能性を探索した。主なメンバーは中野裕考氏、大久保紀子氏、徳重久美氏である。

8. 科学研究施設と地域社会－緯度観測所と近代岩手の文化

The Impact of a Science Institute on Its Local Community: The International Latitude Observatory, Mizusawa and Its Influence on the Modern Cultures in Iwate

①主旨：科学研究施設が地域の文化に与えた影響について、文字資料・非文字資料の調査を通して学際的に考察する。具体的には、国際緯度観測事業を遂行する目的で1899年に岩手に設置された緯度観測所が、単なる科学研究施設の枠組みを超えて近代岩手の文化的諸相（文学、芸能、芸術、教育、スポーツ等）に与えた影響を、科学史・博物館学・史料学・民俗学の視点から調査考察するとともに、緯度観測所関係アーカイブの保存・活用について検討する。

This project aims to examine the influence of the International Latitude Observatory, Mizusawa (established in 1899) on the cultures of its local community in Modern Iwate. Both written and non-written historical materials of the observatory will be closely studied from the aspects of Science History, Museology, Archival Studies, and Folkloristics. The project also discusses how to keep the observatory's archives preserved and accessible.

②プロジェクト担当者：新井由紀夫（本学教員）

③学内研究員：宮内貴久（本学教員）

④学内協力員：

森暁子（本学研究員）、大持ほのか（本学院生）

⑤客員研究員：馬場幸栄（一橋大学）

⑥研究協力員：

⑦活動経過：

◆2018年6月8日、国立民族学博物館共同研究課題「博物館における持続可能な資料管理および環境整備—保存科学の視点から」研究会（於：国立民族学博物館）に参加し、収蔵庫の温度を年間通して20℃に維持することが資料の長期保存にとって本当に必要であるか、また、それが地球環境保全や博物館経営の視点から適切であるか、というテーマで、毎年数か月間しか空調を使用しないという正倉院の事例などをもとに九州国立博物館、東京国立博物館、奈良国立博物館、宮内庁正倉院事務所の学芸員らとディスカッションを行った。

◆2019年3月2日・3日、特別展示・講演会「川崎俊一と池田徹郎 緯度観測所の第2代所長・第3代所長」（於：奥州宇宙遊学館）を開催。グリニッジ天文台等へ留学したのち日本で浮遊天頂儀を作った天文学者・川崎俊一と、広島高等師範学校時代から川崎の親友であり、緯度観測所での気象観測成果を活かして岩手の農業研究にも影響を与えた気象学者・池田徹郎の2人に焦点をあてた。川崎が遺した短歌や池田の絵画作品などを紹介しつつ、池田が緯度観測所所員や地元の教員のために夜間に無料で教えていた数学教室についても解説した。

◆2019年3月14日～17日、日本天文学会2019年春季年会（於：法政大学）において、ポスター発表「木村榮記念館サイトにおける緯度観測所ガラス乾板写真の公開」を行い、緯度観測所のガラス乾板から復元した写真の一部とその解説をインターネット公開する件について発表した。また、口頭発表「映像・音声でよみがえった緯度観測所の平三郎とクモの糸」を行い、カビの生えたVHSテープを清掃・デジタル化した結果、緯度観測所の機器メンテナンス担当者であった平三郎が観測に使用するクモの糸を入手した方法や、緯度観測所が使用していたクモの糸の特徴、クモの糸の具体的な貼り方などが明らかになったことを報告した。

9. 上方落語を用いた近現代京阪方言の総合的研究

①主旨：明治初期～現代の上方落語を、方言の観点から研究し、近代から現代にかけての京阪方言にどのような変遷があったのかを明らかにする。特に、落語同人誌『上方はなし』（昭11～15年）に収められた五代目笑福亭松鶴の速記落語をコーパス化する作業を通して、語彙や文法にみられた変化を考察する。

②プロジェクト担当者：竹村明日香

③学内研究員：

④学内協力員：

宇野和（本学院生）、池田來未（本学院生）

⑤客員研究員：

岡島昭浩（大阪大学）、桂紋四郎（落語家）

⑥研究協力員：

久田行雄（大阪大学院生）、以倉理恵（大阪府立大学非常勤）

⑦活動経過：

本年度は『上方はなし』コーパスの完成と研究成果のまとめに取り組んだ。

『上方はなし』コーパスは、全文検索システム『ひまわり』上で動くようにデータを改変し、旧字体・新字体のどちらからでも検索ができるようにした。また、お茶の水女子大学附属図書館図書・情報課の協力を得て、『上方はなし』初版本の原本画像をリポジトリ（TeaPot）に登録してもらい、コーパスの検索結果と原本画像を対照させられるようにした。現在（2019年1月11日時点）、データの最終チェック段階であり、来年度には公に公開・配布できる予定である。

研究成果のまとめとしては、2018年10月25日（木）「上方落語とことばの世界」（於：お茶の水女子大学）と題した会にて桂紋四郎氏（客員研究員）と共に研究発表を行った。発表内容は以下のとおりである。

(1) 桂紋四郎「爆笑・上方落語～楽しく学ぶ上

方文化～」

(2) 竹村明日香「『上方はなし』と方言研究」
現在、『上方はなし』コーパスを用いた文法・
語彙調査に関する論文も執筆しており、順次学
術誌に投稿していく予定である。

岡島昭浩氏（客員研究員）からは『上方はなし』
第16集の初版本が竹村明日香（プロジェクト担
当者）に寄贈された。

10. 観光の比較社会史

Comparative social history of tourism

①主旨：観光は現代人にとって欠かせない娯楽と
して馴染みが深いものである。しかし歴史的に
みえてみると、観光が人々にとって身近になっ
たのは決して古いことではない。特に、現代のよ
うな自由かつ長距離の往来が難しかったと考え
られる前近代においては、ごく一部の階層によ
り行われるものであった。それがなぜ広く一般
大衆に親しまれるものになったのであろうか。
さまざまな時代や地域の事例を比較・検討する
ことで、人々と観光の関係の変遷を考えてみた
い。

Tourism is familiar as an indispensable
entertainment for modern people. But historically,
it has never been long ago that sightseeing has
become familiar to people. In particular, in the pre-
modern era where it was considered difficult for
free and long-distance traffic like the present age,
it was done with only a few layers. Why was it
widely popular with the general public? I would like
to think about the transition of relations between
people and sightseeing by comparing and examining
examples of various times and regions.

②プロジェクト担当者：大藪海（本学教員）

③学内研究員：

古瀬奈津子（本学教員）、新井由紀夫（本学教
員）、阿部尚史（本学教員）

④学内協力員：

池田美千子（本学AA、放送大学・東洋大学非
常勤講師）、巽昌子（本学特別研究員）

⑤客員研究員：

⑥研究協力員：内田滯子（放送大学非常勤講師）

⑦活動経過：

まず、プロジェクトメンバーがそれぞれ専門
としている時代や地域において行われていた
「観光」、あるいはそれに相当すると思われる
人々の営みについて、事例の検出・検討を行っ
た。そしてそれらの成果を持ち寄ってミニシン
ポジウムを開催し、現代的な「観光」との共通
点や相違点について意見交換を行った。

11. 明治日本の政治と文化—多分野交流か ら問う明治150年

①主旨：平成30年（2018年）は、明治維新（1868
年）からちょうど150年を迎える節目の年であ
る。これまで明治維新、明治日本に関する研究
は各研究分野において進められてきたが、研究
分野間の交渉は稀薄であり、研究の蓄積にした
がって明治維新、明治日本の総合的な理解はむ
しろ困難になってきたように思われる。そこで
本研究プロジェクトでは、明治維新以降の政治
と文化の変容について多面的に検討し、各分野
の研究成果の共有と相互関係の構築を図る。特
に、政治史と文化史を架橋する視点（時間・身
体・技術・教育など）から、明治維新や明治日
本に対する捉え方・歴史観を見直し、新たな研
究の視点や論点を模索することとする。

②プロジェクト担当者：

難波知子（本学教員）、湯川文彦（本学教員）

③学内研究員：

宮尾正樹（本学教員）、宮内貴久（本学教員）、
石井久美子（本学教員）

④学内協力員：

加藤恭子（本学院生）、加藤絵里子（本学院生）

⑤客員研究員：鈴木淳（東京大学）

⑥研究協力員：

⑥活動経過

(1) 第20回国際日本学シンポジウムの開催

本プロジェクトの成果をもとに、第20回国際日本学シンポジウムを開催した。詳細は別頁を参照のこと。

日時：2018年7月7日（土）・8日（日）

場所：お茶の水女子大学大学本館306室

テーマ：「変革と継承の明治文化—地域／都市からみた文化形成—」

(2) 研究会の実施

第20回国際日本学シンポジウムの総まとめとして、コペンハーゲン大学のマーガレット・メール氏を招き、研究会を実施した。

日時：2018年7月29日（日）

場所：お茶の水女子大学大学本館103室

報告①マーガレット・メール氏（コペンハーゲン大学）「歴史学における音楽研究の可能性」

報告②湯川文彦（お茶の水女子大学）「大都市・東京の特殊性」

報告③難波知子（お茶の水女子大学）「武村耕靄『幼稚保育図』について」

(3) その他

難波知子『ビジュアル日本の服装の歴史③明治時代～現代』ゆまに書房、2018年7月

湯川文彦「明治維新时期における統治機構の形成と定着（「明治150年」を考える(3)）」（『歴史学研究』975号、2018年10月）

湯川文彦「井上毅—明治維新を落ち着かせようとした官僚—」（筒井清忠編『明治史講義』人物篇、筑摩書房、2018年4月）

グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門 年報研究論文投稿規定

本年報はお茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門の年報である。

1. 掲載資格

- ・研究論文：投稿資格を有するのは原則として本部門員、及び研究プロジェクトの学内研究員、客員研究員、研究協力員とする。
- ・公開講演会、コンソーシアムなど、部門が行う各種催しにて講演、発表を行った場合、原則として論文（または要旨）を掲載する。都合により講演者、発表者自身が執筆できない場合には、各会責任者（セッション、部会などがある場合には、その責任者、以下「各会責任者」と記す）が抄録等を掲載する。

2. 締切

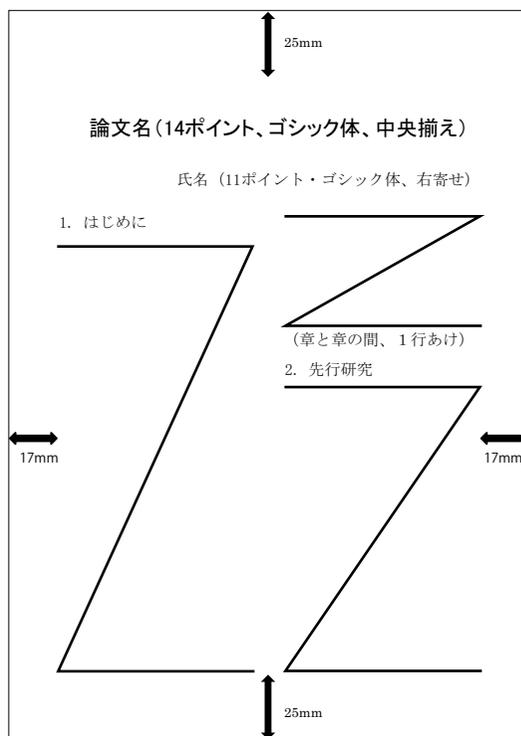
- ・研究論文は12月末日、その他講演会、シンポジウム等での講演、発表は開催後2か月以内とする。但し、12月に開催されるものについては別途指定する。1月以降に開催されるものについては原則として次年度の研究年報に掲載することとする。

3. 書式

- ・B5判横書きWord原稿、22字×38行
- ・余白：上下25mm、左右17mm 本文2段組み
- ・フォントは下記の通りとし、数字は原則として半角の算用数字を使用する。

	「明朝体」	「ゴシック体」
和文	MS明朝	MSゴシック体
英文	Times New Roman	Arial

- ・論文名：14ポイント「ゴシック体」左右中央
- ・副題は9ポイント「明朝体」左右中央
- ・執筆者名：11ポイント「ゴシック体」右寄せ
- ・本文（図表・注・参考文献・資料）
- ・本文：9ポイント「明朝体」
- ・注：8ポイント「明朝体」
- ・参考文献：8ポイント「明朝体」
- ・用紙サイズ：B5判（182mm×257mm）
- ・章と章の間のみ、1行あける。
- ・図表内の文字もできるだけ、本文に準じる。本文との間を1行以上あけること。



4. 提出先

- ・研究論文：年度ごとの研究年報編集委員に提出する。

- ・公開講演会・その他：各会責任者に提出する。

5. 原稿提出方法

- ・Word原稿を添付ファイルで送付する。
- ・メールには日英両語で題目と氏名、連絡先（郵便番号、住所、電話番号）を明記する。

6. 使用言語

- ・使用言語は日本語とする。但し、何らかの理由により外国語で執筆することが認められた場合には外国語を用いることができる。

7. 校正

- ・内容、形式面の校正は原則として著者校とし、著者が行う。原則として著者校は1校のみとする。
- ・事務局は原則として校正を行わない。
- ・校正は原則、電子媒体を通して行う。
- ・論文校正と並行し、目次の校正を行う。両者で論文題目や氏名の表記に不一致がないことを確認する。
- ・提出先、問い合わせ先は、シンポジウムなど、各種催しでは各会責任者、研究論文は編集委員とする。
- ・各会責任者は校正原稿がそろった時点で問題がないか最終確認を行い、編集委員に提出する。
- ・万一、2校以降が必要な場合には各会責任者が行う。

8. 原稿の査読

- ・原則として査読は行わないが、以下に該当する原稿は不掲載、または修正を求めることがある。
 - (a) 内容が本部門の活動趣旨になじまないと判断されるもの。
 - (b) 研究論文の場合、内容的に研究論文とは見なせないもの。

- (c) 個人攻撃・差別的表現など、公的なメディアに掲載するには不適切と考えられる記述を含むもの。

- (d) 極めて煩鎖な組版上の操作が必要であるもの。

9. その他

- ・投稿論文執筆者には、雑誌刊行時に2冊を贈呈する。抜刷は作製しない。
- ・著作権などの処理は原則として執筆者が行う。
- ・年報に掲載されたものは原則としてWeb(Tea Pot)上で公開される。Webでの公開を希望でない場合は事前に各会責任者、または編集委員に連絡する。
- ・同様の内容が報告書等に掲載される場合には、本研究年報の方をオリジナル原稿とする。

第 21 回国際日本学シンポジウムのお知らせ

【日程】

平成31年 7月 6日（土）13：00－17：30

古瀬奈津子（お茶の水女子大学）

司会

小玉亮子（お茶の水女子大学）

【開催場所】

お茶の水女子大学本館 3 階306室
（東京都文京区）

最新の情報は、グローバルリーダーシップ研究所
比較日本学教育研究部門のホームページ（<http://www.cf.ocha.ac.jp/ccjs/index.html>）にてご確認ください。

【全体テーマ】

グローバル・ヒストリーと国際日本学（仮）

（文責：古瀬奈津子）

近年、歴史学においては、一国史の枠を超えて地域間のつながりや関係を、ある時は地球規模で、ヒト、モノ、知識などの移動について考察するグローバル・ヒストリーが、新しい歴史研究としてひとつの潮流を形成している。しかし、日本史はその潮流から相変わらず除外されているように見える。そこで、グローバル・ヒストリー研究を牽引されている羽田正先生（東京大学）に基調講演をお願いして、グローバル・ヒストリーと日本史を関係づけていただきたいと考えている。果たして、グローバル・ヒストリーの研究方法は、日本史にも有効なのだろうか。

その他、近代の日本と台湾の衛生問題を芹澤良子氏、ブラジル移民と日本語教育について本林響子氏、日本古代から中世にかけての日中比較史について古瀬が研究発表を行い、羽田先生にも加わっていただき、グローバル・ヒストリーをめぐるパネルディスカッションを行いたい。司会は、教育史の小玉亮子氏をお願いする予定である。

〈登壇予定〉

基調講演 羽田正氏（東京大学）

パネリスト 本林響子（お茶の水女子大学）

芹澤良子（お茶の水女子大学）

バックナンバーのご案内

『比較日本学研究センター研究年報』第1～4号、及び『比較日本学教育研究センター研究年報』第5～13号、及び『比較日本学教育研究部門研究年報』第14号の在庫は以下の通りです。

ご注文、お問い合わせは下記までご連絡ください。

メールアドレス ccjs@cc.ocha.ac.jp (グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門)

号	残部	価格 (送料別途)
第1号	約25部	1,000円
第2号	約30部	1,000円
第3号	約30部	1,000円
第4号	約5部	1,000円
第5号	約5部	1,000円
第6号	約60部	1,000円
第7号	約50部	1,000円
第8号	約5部	1,000円
第9号	約25部	1,000円
第10号	約15部	1,000円
第11号	約50部	1,000円
第12号	約40部	1,000円
第13号	約10部	1,000円
第14号	約45部	1,000円

なお、『比較日本学研究センター研究年報』第1～4号、及び『比較日本学教育研究センター研究年報』第5～13号、及び『比較日本学教育研究部門研究年報』第14号は、お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション(<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>)にて公開されています。こちらをご覧いただけましたら幸いです。

編集委員より

国際日本学シンポジウムおよび国際日本学コンソーシアムの掲載論文の題目は、一部、発表時と異なるものがあります。著者の方から提出された原稿の通りに掲載しました。また、一部の執筆者は要旨のみの掲載となっております。表記などについては編集の都合上、編集委員の方で統一させていただきました。

『グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門研究年報』
2018年度編集委員 田中琢三 松岡智之 加藤絵里子 芹澤良子 吉井祥